敗者復活戦

小笠原敏夫

それは突然、やってきた。夕食時、テレビにボクシング場面が映し出されたのだ。二人の年配のボクサーが懸命に闘っている。その真摯な闘いは私の目を引き付けた。それは、「おやじファイト」といって、中高年の素人ボクサーを募り、毎月闘わせるものだった。（これだ！）と思った。私は参戦を決意し、「おやじファイト」の事務局に電話した。

私は酒田に住む退職後八年の元、高校国語教師である。妻、息子、娘の四人家族だが、息子と娘は東京で就職していた。二人には電話で私の参戦の決意を知らせた。

私は退職一年前にアキシデントで座骨神経痛を発し、激痛で歩行困難、このため私の最後の教員生活は最悪の状況となり、敗者の如く退職したのだった。だいたい今まで、ボクシングをやっているというので、私の国語は評価されなかった。更に国語教師というので私のボクシングもまた評価されなかった。それに私はリングで一戦も闘っておらず、私のボクシングキャリアはゼロだった。それが私の大きな負い目になっていた。

家族会議が開かれた。私がおやじファイトに出る、と言うと妻は仰天し、強硬に反対する。私は今までの職場での無念さを訴え、説得を続けた。人生は敗者復活戦だ、これは私のワイルドカードだ、この試合は六十代最後の挑戦なのだ、と。

続いて息子も電話で反対してきた。試合のチケットを送ると言うと、「絶対反対だ。チケットが来ても俺は会場に行かないからな」と断言する。この頑固さは誰に似たのか？

結局、賛成したのは娘だけだった。彼女は時に何者にも捕らわれない独自の判断を示すことがあった。娘は試合のセコンドまで引き受けてくれた。

書類が来たので生年月日等必要事項を記入する。当時、私の体重は六十八ｋｇだった。六十四ｋｇリミットのライト級にエントリーした。あと四ｋｇはトレーニングで落とせるだろう。申込書を送り、トレーニングを始めた。

事務局から電話が来る。六十八歳という私の年齢が問題だと言う。「ほぼ同年齢の相手を見つけるのが容易でない。探してみますが……」と答えはしたが。

東京に下見に出かけた。新宿フェイスというビルで、この四階にリングがある。

ここは女子プロボクサーのライカが世界タイトルマッチを行う場所だった。

入口が分からない。年配の男性と共に入口を探した。エレベーターで共に上り、会場、中段の席に並んで座った。ここはすり鉢状のリングが最も良く見える所だ。

自己紹介し合う。彼は島田さんといい、態度も口ぶりも穏やかですぐに打ち解けた。年

齢は同い年で、彼は「竹馬の友に出会った気持ちだ」と言い、以後、親密な交際が始まった。彼は職場の後輩が試合に出るので応援に来たと言う。

ＢＧＭと共に両選手が登場し、選手紹介の後、試合が始まった。どの選手も熱く闘い、その声援は温かく、何よりも家族的な雰囲気が良かった。

私は在職中、転勤の度にボクシング部を作った。部活動ではボクシング部の監督兼コーチをした。そこで各試合、両選手の優劣や試合の経過・結果を島田さんに解説した。ことごとく私の言う通りになるので、彼はすっかり感心する。

三か月後、また、新宿フェイスを訪れた。会場、中段の席で手招きする人がいる。何と島田さんだった。並んで座り、私はいつかこの大会に出場するつもりだと打ち明けた。

事務局からライセンスと前の大会のパンフレットが来る。全選手ともプロのボクシングジムに通っていた。セコンドは当然、ジムのトレーナーである。私のセコンドは東京に住むスポーツ万能の弟と私の娘で、共にボクシングは全くの素人だ。

友人のためにリングサイド券を十枚確保した。

私の一番の親友Ｋ君に電話する。彼は驚愕して叫んだ。

「こらっ、トシオ、お前は自分の年を分かっているのかね？　我らは六十八歳だぞ。六十八といえば古稀に近いのだぞ。古稀の爺がボクシングの試合に出る、だと。気は確かか？　トシオ！」と散々に叱られた。「お前は昔から少し変わっていたからなあ」と呟き、その内、気は確かなようだと思ったのであろう、最後は賛成してくれた。そこでチケットを送ったが、彼の隣に息子を座らせることにした。息子も彼から多くを学ぶことだろう。

友人代表Ｓ君にチケットを送り、応援を頼んだ。スポーツマンの彼は「面白い」と言って即座に承諾、観戦する友人を募り、応援団を結成してくれた。

宿と列車の手配をする。一泊して翌朝、会場に向かい、試合する。その日は泊まり、翌日、酒田に帰る日程で、二泊三日の旅となった。私の試合出場は誰にも知らせなかった。

ところが試合一週間前、親戚の若者が急死した。私は郊外にある彼の家を知らない。彼の兄が車に私と妻を乗せて案内してくれた。だが彼は車中、絶え間なくすさまじいくしゃみをし、鼻水を流し続けたのだ。

帰宅するや、妻はトイレに駆け込み、下痢と嘔吐を繰り返す。私は何でもない。（弱いなあ）と妻を笑っていた私が、何と三日後にダウンした。身体がだるい、食欲はゼロで熱は三十九度もある。直ちに医者に行く。インフルエンザだと言って、薬を山のように処方してくれた。おかゆを作って食べ、薬を飲んでは横になり、三日間、寝て過ごした。

三日後に何とか立てるようになった。明日はおやじファイトに出発だ。用意してきたボクシングの試合用品をバッグに詰めた。当然、妻の猛反対が始まった。

「試合前には検診があり、ドクターが厳重にチェックする。心配するな」と私は言った。

翌日、風邪薬持参で列車に乗り、上野のホテルに入った。熱は下がったものの体重が心配だ。体重オーバーで失格になることを恐れ、夕食と翌日の朝食を抜いた。

当日、内診、血圧、体温と検診は進み、体温は三十六度八分だった。私の平熱は三十五度八分なので、微熱状態だ。係員はパスと言う。直後の計量で、係員は五十九kg、パスと告げた。私は愕然とした。あと一kg落とせばフェザー級ではないか。今まで食事を抜いて来たのは何だったのか？　肩や胸の筋肉が一回りも二回りもしぼんだように感じた。

試合は全十二試合、私の出番は第十試合だった。まだ時間がある。朝食用のサンドイッチを食べ、暫く観戦してから身仕度を整えた。控え室でストレッチを入念にやり、続いてシャドーボクシングに移った。だが腹筋に力が入らない。手が伸びない。足が動かない。インフルエンザで今までのトレーニングの成果は全て失われたのだ。止むを得ない。

いよいよ私の試合だ。娘の肩に両手を置いて入場した。私のシャツとトランクスは赤なので、赤コーナーを譲ってもらっていた。リングに上がった私に何と花束が贈呈されたではないか！（島田さんが贈ってくれたのだ）どよめきが起こる。

青コーナーの選手が紹介された。「オールドソルジャー小坂」といい、年齢は六十五歳で柔道の経験があるという。背は私よりやや低いものの、がっしりとした体格だ。

続いて私の紹介に移った。アナウンサーは声高く告げた。「年齢は何と六十八歳」と。拍手が起こる。「試合に臨んでのコメントは、六十代はまだ若い。六十代以上の人が今日の豊かな日本を造った。全国の六十代以上の人にエールを送る」と紹介し、私のリングネームを高々とコールした。「ノープロブレン・オガー」と。

レフリーはテキサスハリケーン、彼は全試合を一人で捌いた名レフリーだった。

リングに上がって冷静であれ、私が生徒に言った言葉だった。さて己はどうか？

一R、リング中央に出て打ち合った。相手は左ジャブを続けて三発、直後に右ストレートを打ってくる。私は彼の左を右手で払い、左ストレートを打った。パリーといって最も基本的な技術だ。だが彼のパンチはとても重く、払い落とすことが出来ない。今度は左手で彼の左パンチを払った。逆パリーといって、直後に右ストレートを打ち込む。だが相手には何のダメージもない。相変わらず突進してくる。こうして一Rは終わった。

互角だと思う。だが、息切れがひどい。私のスタミナはこのラウンドで尽きていた。この試合は三ラウンドまで行く、つまり判定までもつれ込む……と悪い予感がした。

二R、一分間の休憩のお蔭で、手と足に幾らか力が戻ってきた。開始直後、打ち合いつつ左を合わせ、続いて右ストレートを打った。まともに顎にヒットし、相手は腰を落として後退する。それを追ってワンツー左フックを打った。彼は体勢を立て直しつつ右ストレ

ートを返してくる。だが私のスタミナはそこまでで追い打ちをかけることが出来ない。
三R、一進一退が続く。私はガードを固めた。アナウンスがラスト十秒を告げた。
と突然、彼は左右を振るって猛然とラッシュしてきたのだ。私にはもはや応じるスタミナがない。ロープまで下がり、やっと右を一発返した。それで精一杯だった。
試合終了、判定はドロー、つまり引き分けだった。年齢を越えたファイトだというのであろう、盛んな拍手、何とレフリーまで拍手している。
こうして私の挑戦は終わった。花束は、部屋に飾るようにと娘に渡した。娘は、「良かった。良い試合だった」と言って笑顔で受け取る。息子は、「父ちゃん……」と言って首を振った。皆と駅で別れたが、島田さんとはその後も交友が続いている。
帰りの車中でホッとする。何とかボクシングの試合にはなったようだと。でもあの親戚の葬式とインフルエンザは読めなかった。これが普通の体調なら……と実に残念に思う。と、いきなり、アドレナリンが噴き出してきた。次の試合は万全の体調で闘うぞ、と。
後で送られて来たＤＶＤには克明に試合が記録されていた。
息子は親友の隣で手を挙げて声援を送っていた。飛び交う観衆の声援は今や、その一声一声まで鮮明に分かる。「ジャブ、ジャブ」「ストレート」「アッパー」あるいは「足使って」と。けれどもリングで闘う私の耳には、あの時、全てが合わさってワー、ワーという騒音となって聞こえて来たのだ。
だが、三ラウンドを通して私の耳に入って来た音がある。
一筋の細い女性の声だった。アシスタントセコンドについた娘の声だった。
「パパー、パパーっ、パパーっ！」……と。

小笠原敏夫

おがさわら　としお

本名　小笠原敏夫
ペンネーム　小笠原新
早稲田大学教育学部を卒業、山形県に高校国語教師として赴任。
文芸思潮の銀華文学賞で「チットールガルの残照」「異聞保元の乱」「ハーネス物語」を年ごとに奨励賞を受ける。また、鶴岡市より「高山樗牛賞」を受賞した。
長編歴史小説「シーギリヤの雨」（文芸社 1,600 円）が直木賞候補作品として推薦された。
近年、短編小説集「ハーネス物語」（文芸社 600 円）を文庫本で発表。両作とも現在、発売中で、皆様のご一読を得られればこれに勝る幸せと光栄はない。